# どうしてますか

洲浜昌三

ゴミを出す人

「ゴミくらい出してよ」と言われ
はち切れそうなビニール袋を抱えて
雑木林の陽が斜めに落ちる朝の道路へ出る

「退職して毎日どうしていますか」
「…ええ…まぁ…特に…何も…」
「うらやましいご身分ですね」

ぼくは詩人仲間だけの詩人だから
詩を書くのに忙しい
などと近所のおばさんに漏らしたら
不審な目で見られるし
今後の付合いが面倒なことになるので
「ま　ゴミ出しが仕事です」
と軽く追加し
朝の空へ朗らかに笑う

無言でも居場所があった三十五年
肩書きを失い自分を証明できない八年

「どうしていますか」と聞かれる度に
ぼくは裕福で自由な遊び人になる

『現代の風刺25人詩集』（コールサック社）より

「どうしてますか」と聞かれるといつも答えに困る。何もしていないわけではない。一篇の詩を書くのに、何日もかかる。脚本書きには何ヶ月もかかるし、上演までには何度も稽古をし、様々な仕事がある。

しかし、ぼくは詩人や劇作家として認知されているわけではない。五十坪の畑で野菜を作っているが、「農業です」といえば笑われる。他人には、「退職して年金でのんびり暮らしている人」である。

ぼくが勤めた初任校は益田工業高校だった。矢富厳夫先生と文芸部を担当し、その後、田原敏郎先生のあとを受け柔道部を引き継いだ。「石見詩人」に誘われたのはこの二人の先生からだった。邇摩高校へ転任したとき、文芸や新聞を希望した。職員会議に出ると、演劇部顧問の蘭にぼくの名前があった。全く予想していなかったが、新任の若造に文句は言えず、黙っていた。それ以来、川本高校を経て大田高校で退職するまで、二九年間演劇部を担当した。ほぼ毎年脚本を書き、県大会へ二十回、中国大会へ十回出場した。授業、個人指導、分掌の仕事、演

劇と忙しかったが、いい劇をつくるために生徒たちと苦楽を共にするのは楽しかった。

平成十二年に退職したとき、演劇部の卒業生たちが慰労会を開いてくれた。「先生、またやりましょう！」。弾んだ声に、一瞬、醒めた意識が頭をもたげた。しかし、「いやぁ、もういいよ」と逃げるわけにはいかない。

社会人の劇団は大変である。みな忙しい、やりたい人は少ない。場所がない。カネがない。時間がない、お客さん集めの苦労、広告集めの重荷……数ヶ月前に、高校演劇中国大会の事務局を担当し、百万円を越す広告集めと大会運営から開放されたばかりだった。

劇研「空」にしたのはこんな思いがあった。以前大田に、演劇サークル「青空」があり、ぼくも協力したことがあった。早稲田に「劇研」という演劇集団があり、いい劇を上演していた。「劇団」として拘束しても続かない。二、三人になっても、創作や劇の研究、劇評執筆、詩の朗読、民話の語りなどはできる。

発足した年の九月には「しまね文芸フェスタ」でぼくが書いた詩、「江戸から来た人」を群読。翌年三月には創作劇「素敵な家族」、九月には石見銀山の大森で「詩の朗読と語り・創作民話劇」を公演した。

現在までに、三十五回、劇や朗読など大小様々な舞台発表をしてきた。一連の「朗読を楽しむ」では、毎回、詩の朗読も取り入れ、創作を重視し、外部の人たちに声を掛けて参加してもらっている。「茨木のり子さんを偲んで」では、一時間近くかかる長編詩「りゅうりぇんれんの物語」を群読した。

単なる朗読だけではなく合唱や歌、演奏を組み込んだり、映像や装置、音響、照明なども活用している。客さんに、おもしろくない、と思われたら、お終いである。

活動の目標に、こんなことを掲げている。「感動のある舞台の創造」「地域の歴史・文化の掘り起こしと再創造」「独自性と普遍性の追求」「高校演劇の応援」。

小中学校での朗読の指導、脚本提供などもしてきた。昨年は津和野町立青原小学校で、金子みすゞの詩や群読の指導に行ってきた。

昨年末からは忙しかった。大田で、文化プロデューサー育成講座が開催され、実際にイベントをして実践することになった。何度も会議を重ねたが、いい案がでない。以前から劇研「空」でやりたいと思っていた案を出したら、タイトルが「三瓶の魅力を語り歌う」と決まった。

益田工業高校の時の生徒だった佐々木俊和君が、十数年前「三瓶の四季」というすばらしい写真集をだした。感動して久しぶりに会い、スライドで投影し詩をつけて発

表したい、と話し、了解を得ていた。それが実現することになり、すぐ佐々木君と連絡をとった。

その他の演目は次のようなものが決まった。石村勝郎さんの詩「三瓶連山創世記」、洲浜昌三の詩「空にそびえる草原」、「出雲風土記」柿本人麻呂の和歌、少年少女合唱団による「三瓶小唄」（丘灯至夫作詞）他、男性合唱団による「大田高校校歌」（土井晩翠作詩、山田耕筰作曲）他、「この空のもと」（洲浜昌三作詞、米山道雄作曲、大田市連合青年団二十周年に依頼されて四十年くらい前に作った）。トリは、石見に伝わる伝承を創作劇にして絵を投影しながら朗読劇として劇研「空」が発表する。「海を越えサヒメの山へ」（洲浜昌三作）という題で正月明けに書き上げた。

発表は二月二日、大田市民会館中ホール、約七十人のお客さん（席は百人）があり、アンケートも好評だった。

三月九日、浜田で、「石見演劇フェスティバル」が開催された。昨年は創作劇「石見銀山旅日記」で参加したが、今年は「海を越えサヒメの山へ」を上演した。

八月三十日、中ホールで「朗読を楽しむ」を開催。まど・みちおさんが一〇四歳で他界されたので、「まどさんを偲んで」を特集とし、ぼくが詩を解説し、劇研「空」のメンバーが朗読した。少年少女合唱団に「ぞうさん」や「山羊さんゆうびん」など数曲歌ってもらった。歌の著作権料、朗読用と詩を掲載する著作権料、写真を利用する許可など、思わぬ出費があった。他には地域のベテランに声を掛けて、六人に朗読や語りで舞台へ立ってもらった。どのステージでもホリゾント幕にプロジェクターで映像を投影した。アンケート結果も大変好評だった。

八月三十一日、大森で天領祭りがあり、劇研「空」は今年も瓦版売りで参加。瓦版作りに時間がかかった。

八月二十五日に八十六編の小説と随筆がドサッと届いた。高等学校文化連盟の小説部門の審査（八年目）で、九月三日〆切！選評を書くためには何度も読み返さねばならない。田中瑩一先生からバトンタッチされた年には三十二編だったのに…力作もあり面白いので楽しく悲鳴をあげている。

秋は高校演劇の季節。今年も十一月初旬、県大会があり九校の劇を観て講評。二十二、二十三日には広島県大会の講師審査を頼まれた。事前に脚本を読み、二日で十三校の劇を観る。たいへんだが若者の感性に触れ、名舞台に出会う喜び。「お役に立てば幸せ」と楽しんでいる。

「どうしてますか?」。こんなに詳しく答える必要はないが、「ゴミをだす人」も結構忙しいのである。